見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち

September 2018 vol.53

◆ 神野新田（じんの）

所在地：豊橋市神野新田町
交　通：豊鉄バス「牟呂学校前」停 南 約 600m

豊橋市の神野新田は明治時代に開拓された新田で、水稲の早期栽培を中心とし市の穀倉地帯となっています。神野新田の前身は明治中期に旧長州藩の重臣・毛利祥久が開拓を手がけた毛利新田です。明治 18(1885)年に愛知県令(知事）となった山口県出身の勝間田稔から牟呂地区での新田開発を働きかけられた毛利は、明治 20 年、賀茂用水を干拓予定地まで延長して新田に水を引くことを考え、1,100 町歩の干拓面積、総工費 12 万円余りの「海面築立開墾願」を愛知県に提出します。明治 21 年には賀茂用水の牟呂までの延長が認められ、新田開発が起工します。その後、明治 22 年 9 月には、潮止めを行った直後に台風が襲い、築き上げた堤防の修復工事を余儀なくされますが、明治 23 年 5 月、ようやく 3 里に渡る堤防が本格的に完成し毛利新田が誕生します。しかし、今度は翌明治 24 年 10 月 28 日、濃尾地震が発生します。濃尾地震は岐阜県の根尾谷断層を震源とし、岐阜県から愛知県にかけて、広い範囲に渡って被害を出した地震でしたが、震源から遠く離れた豊橋の毛利新田でも、堤防が甚大な被害を受け、さらには追い打ちをかけるように、翌明治 25 年 9 月に大暴風雨が襲い、とうとう新田は壊滅状態となってしまいました。

受難の歴史の毛利新田を引き継いで、新田の復活に取り組んだのが、名古屋の豪商・神野（かみの）金之助でした。神野は明治 26 年に 4 万 1 千円で毛利から新田を譲り受けると、碧海郡北新川の土木業者・服部長七とともに、堤防の再築工事に取りかかります。服部は、セメントが発明される前に、土間などの仕上げに重用されていた堅い人造石（風化した花崗岩に石灰と苦汁（にがり）を混ぜて練り合せたもの）の職人で、神野と服部は人造石工法を採用し、以前より堤防の高さを 6 尺（約 2m）高くして 4 間（約 7m）とすることを決め、難工事の末、明治 29 年に干拓に成功します。入植当初は収穫量も少なく、逃げ出す小作人もありましたが、明治 30 年代半ばには反あたり 1 石(180 リットル)の収穫量となり、大正期になると新田の経営も軌道に乗り、その後は農地解放を経て、現在の穀倉地帯につながっています。

神野新田の堤防は総延長 12km にわたり、第 3 号堤と第 4 号堤には、33 体の観音像が 100 間（約 180m）の間隔で安置されています。これは、新田の農民が巡礼することにより堤防の安全を祈願するとともに、定期的に巡礼に訪れることで、堤防の不具合の早期発見につながることを意図したものと言われています。

新田内に明治 25 年に開かれた神富神明社には、神野金之助の功績をたたえ、神野金之助翁頌徳碑が設置されています。また、同じく新田内には、神野新田資料館が開設されており、先人達の開拓の成功と歩みが残されています。

今年の 12 月には、豊橋市の市民団体により、神野新田の開発を手掛けた人々の人生を描いた群像劇「神野新田物語」が上演される予定です。

神野金之助翁頌徳碑

堤防の観音像

◆ 災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

◆神野新田の周辺には…

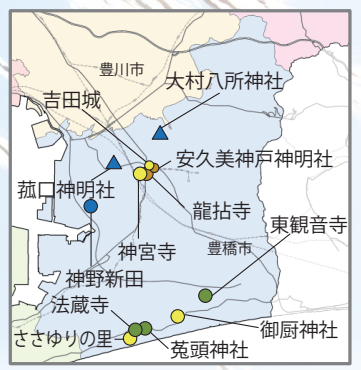
● 大村八所神社（おおむらやところじんじゃ）

所在地：豊橋市大村町横走

交　通：JR 飯田線「下地」駅 東 約 3.5km

神社由緒には、大宝元（701）年大村神社として創建されましたが、天文 8（1539）年大津波により流失したことが記されています。（この天文年間の大津波は、高潮であると考えられます。）

その後天文 20（1551）年、八王子社として再興されています。



● 菰口神明社（こもぐちしんめいしゃ）

所在地：豊橋市菰口町

交　通：JR 飯田線「船町」駅 南西 約 900m

豊川河口付近では津波をはじめ、高潮による災害が多く発生しています。この神明社は天文 9（1540）年の津波によって、石巻町まで流出したと伝えられています。

◆ 詳細な地図は『歴史地震記録に学ぶ 防災・減災サイト』（http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/index.html）をご覧ください。

★ 豊橋炎の祭典

豊橋炎の祭典は、豊橋公園内の豊橋球場とその周辺一帯で開催される観光イベントで、毎年 9 月の第 2 土曜日（平成 30 年は 9 月 8 日）に開催され、東三河伝統の手筒花火が披露されます。

メインの炎の祭典（炎の舞）では、和太鼓の勇壮な調べに乗せた手筒花火を始め、額字や綱火、仕掛け花火といった東三河の伝統花火を見ることができます。また、昼の部では、豊橋名産ちくわ、豊川いなり寿司、田原ポークなど、東三河のうまいものを食べ尽せる「ぐるぐるグルメフェス」を始め、ミニ手筒で作るヨウカン作り体験や、芝生広場ステージでのええじゃないかお札まきなど、様々な企画が用意されています。

豊橋商工会議所 HP より

なお、名古屋を始め、東京や大阪、博多などを出発地とし、東海地方の魅力と組み合わせた炎の祭典ツアーが、各旅行会社で企画されています。

9 月のあいちの花

平成 30 年 9 月のあいちの花はスプレーギクです。スプレーギクはアメリカで作出されたキクの園芸品種群で、摘芯（てきしん）（芽の先を切り落とし、脇芽を増やすこと）により、1 本の枝から複数の花をつけます。「スプレー」は複数の花が広がっている様子からきています。

みんなの園芸 HP より

花の形は一重咲きのものから八重咲きの豪華なもの、ボールのような形に咲くものなど、数多くの種類があります。最近では矮化剤を使用して草丈を低く抑え、鉢植え用のポットマムにも利用されています。

●ブレイクタイム●

♪ 牟呂発電所址（樋門）

豊川から神野新田に水を導く牟呂用水に、かつて水力･火力併用の発電所がありました。これは、明治 27 年に初代豊橋町長・三浦碧水らが発起人になって設立された豊橋電燈株式会社が、牟呂用水を利用して造ったもので、愛知県内で最初の水力発電所と言われ、発電出力は 15kW、当時の豊橋町で主に陸軍 18 連隊に電気を供給していたそうです。

発電所の基礎などの遺構は区画整理事業の際に撤去されてしまいましたが、現在は水門跡の構造物が残されています。（地図は表面参照）

東三河を歩こう HP より

◆ この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆ 県内の歴史地震記録をホームページで紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『歴史地震記録に学ぶ 防災・減災サイト』（http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/index.html）をぜひご覧ください。

（発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター　平成 30 年 9 月）